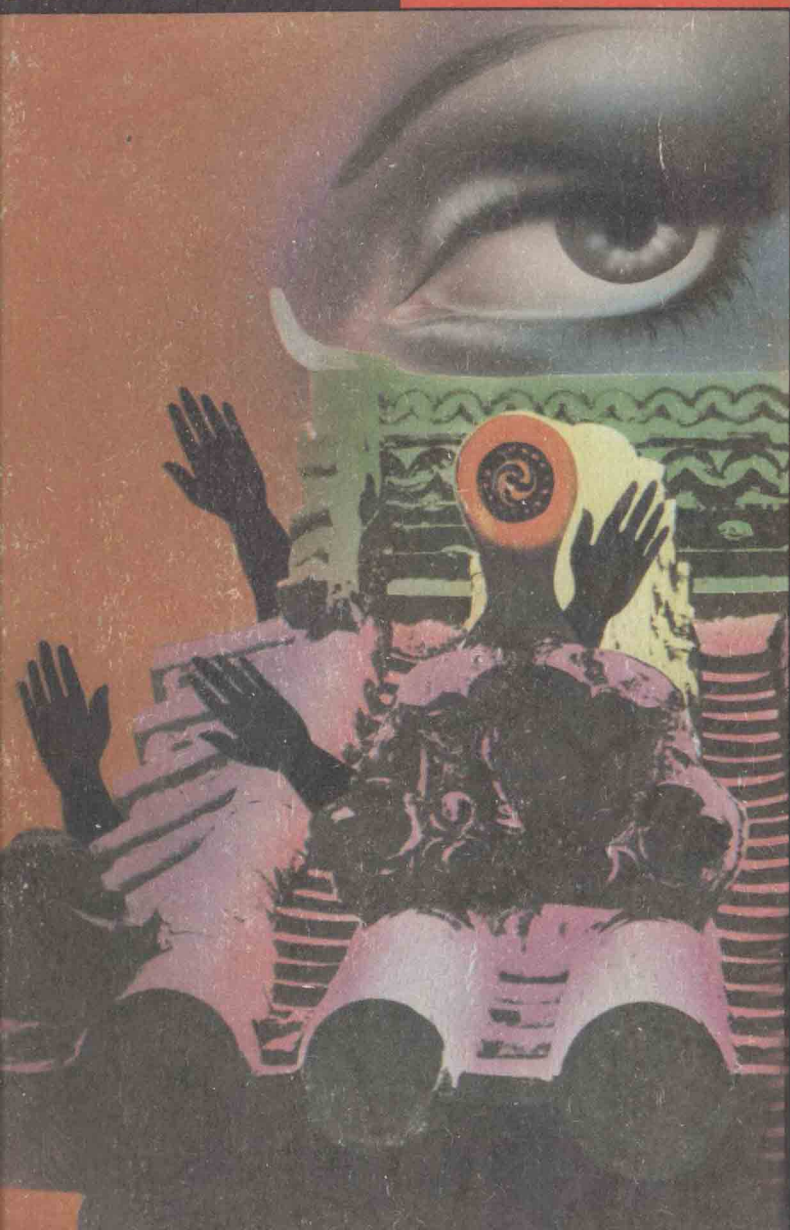


都筑道夫

朱漆の壁に

血がしたたる





うるし
漆の壁に血がしたたる
都筑道夫

発行者 徳間康快

発行所 徳間書店

東京都港区新橋四ノ一〇 郵便番号一〇五

電話四三三・六二三一 振替東京四一四四三九二

都筑道夫

朱漆うるしの壁に血がしたたる

印刷所 図書印刷／製本所 ナショナル製本

Michio Tsuzuki © 1977 検印廃止

落丁・乱丁はおとりかえいたします。

昭和五十二年十二月十日 初刷

目次

第?章	片岡直次郎が逮捕される	5
第一章	推理作家がトリックを論じる	22
第二章	過去の事件が説明される	42
第三章	牛山松吉巡査が登場する	65
第四章	赤土蔵の扉がひらく	87
第五章	人形が死体を見まもる	118
第六章	物部太郎が金沢まで来る	143
第七章	三人目の死体が現れる	168
第八章	生首はだれも知らない	189
第九章	物部太郎が真相を語る	208

カバー・扉
イラスト|| 中原
脩

朱漆うるしの壁に血がしたたる

第?章 片岡直次郎が逮捕される

「片岡直次郎、あんたを逮捕する。森田緋美子殺害の容疑でだ」

牛山松吉巡査は、塩から声をあげて、直次郎の腕をつかんだ。西日をうけて、ぎらつく手錠が、がちりと音を立てた。思いもかけず、プレゼントされた武骨なブレスレットを、あっけにとられて、直次郎が見つめていると、牛山巡査は一歩さがって、腰の拳銃をひきぬいた。

「さあ、そのまま先に立って、駐在所まで歩くんた」

「待ってくださいよ、牛松さん」

片岡直次郎は、手錠でつながれた両手で、リヴォルヴァーの物騒な口をふさごうとした。牛よりも馬を連想させる顔の相手は、また一歩あとへさがって、

「本官は牛山だ。牛松ではない」

「わかりました、牛山さん。でも、ぼくを逮捕するなんて、むちゃくちゃだ。逮捕状もないのに、こんなものをかけて、そんなものを突きつけるってのは、ひどすぎますよ」

直次郎が手銃の両手をふりかざすと、牛山巡査は拳銃の撃鉄を起して、

「両手はさげておけ。この前みたいに魔術をつかつて、手銃を外したら、ほんとうに射つぞ」

「魔術じゃなくて、奇術ですよ。あれを警戒してるんですか。あんなことして見せなけりゃ、よかつたな」

と、物部太郎探偵事務所の助手は、猟銃で射たれたアドバルーンみたいなため息をついてから、
「わかりました。自分じゃ外しません。牛山さんに外してもらいます。こんなことをして、よろこぶのは、真犯人だけです。よくを駐在所につれて行くより、現場保存のほうが、だいじだと思えますがね」

「土蔵には、銃をおろした。鍵は、わたしが預っている」

と、牛山巡査は左手で、胸ポケットをたたいて見せて、

「いいから、さっさと歩いてもらおう。逮捕状がどうのこうのといっていたが、これは緊急逮捕だ」

「それにしても、駐在所まで歩かされるのは、かなわないな。刑事さんたちが来るのを、ここで待っていちゃいけないんですか」

ここは石川県利権市裏関町蛇塚、町といっても、能登半島の山のなかだ。山畑を前にひかえて、裏関きつての旧家、森田邸の重厚な瓦屋根と築地塀が、青葉の木立ちにかこまれているだけで、手ぢかに家は見あたらない。駐在所のある裏関町宇賀神まで、山道を歩いてくだと二、三十分

かかるだろう。山のふもととの市の中心部にある石川県警察本部利鎌警察署から、車であがってくれば、およそ一時間半。牛山巡査の通報をうけて、刑事たちがすぐ飛びだしたとすると、あと四十分ぐらいでつくはずだった。

「だめだ。駐在所へいってもらう」

と、牛山松吉は直次郎のうしろを見た。ふたりが立っているのは、森田家の門前だ。屋根のない大きな門は、いっばいにひらかれている。太い門柱のきわから、狭い空堀にかかった石橋にかけて、十人ちかい人間が立っていた。

当主の森田清も、ホワイトシャツの腕を組んでいた。その隣りには弟の助が、背の高いからだを前かがみにして、兄よりも禿げあがった額に、西日を反射させている。清の息子の進吾も、黄土いろのデニムのシャツの腕まくりをして、こちを睨んでいた。番頭さん、と呼ばれている出淵謙治郎もいた。その息子の昭市は、どういうつもりか、片手に六尺棒をついて、大きな目を光らしている。

数時間前までの親切で、ひとなつっこい表情は、どの顔からも消えていた。牛山巡査は、まさかリンチの心配をしているのではないだろうが、たしかに直次郎がこの場に、とどまっていなはいろがよさそうな雰囲気だった。片岡直次郎は肩をすくめて、

「わかりました。駐在所へ行きますよ。でも、歩くのは勘弁してください」

「そういったって、自転車のうしろに、あんたを乗せてゆくわけには行かないよ」

と、牛山巡査は顔をしかめた。築地塀のはずれに、駐車場につかっている空地があつて、そこに巡査の自転車がおいてある。隣りで、ふんぞりかえっているように見えるのは、直次郎が金沢で借りたレンタカーだ。

「だったら、ぼくの車で行きましよう」

直次郎が駐車場へ顎をしゃくると、牛山巡査はにべもなく、

「この道を片手で運転して、片手であんたに拳銃をつきつけておくような芸当は、わたしにや出来ん」

「とちゅうで、車から飛びだしたりはしませんよ。おとなしく連行されます。ぼくだって、時間をむだにしたくはないですからね」

こうなったら、早く駐在所へいって、東京の物部太郎探偵事務所に、電話をかけたかった。ぐずぐずしていると、お目つけ役の直次郎が出張ちゅうなのを幸いに、太郎は事務所を早じまいにして、どこかへ遊びにいってしまふかも知れない。

「じゃあ、ぼくが運転します。こんな山道くらい、手錠をかけられていたって、おりられますから」

直次郎が駐車場のほうへ行きかけると、牛山巡査はあわてて、その前に立ちふさがった。森田家の人びとからは離れて、心配そうに立っていた推理小説家の紬志津夫が、このときに近づいてきて、

「公務に口を出して申しわけないが、牛山さん、ぼくが運転するというのは、どうだろう。片岡君はぼくの依頼で、ここへ調査にきたひとだ。それが逮捕されたとなれば、責任上、ぼくも同行するべきだ、と思うんです。ぼくが運転して、あなたがたがバックシートにすわれば、問題はないでしょう」

「それはまあ、そう——問題はないですな」

牛山の馬づらが、ほっとしたようにうなずくと、紬志津夫は直次郎のそばへ行つて、右手をさしだした。直次郎は、あっさりと手錠を外して、サフアリー・ジャケットのポケットに手をつっこむと、車のキイをとりだした。にやにやしながら、紬はそれを受けとって、車に足をはこんだ。巡査の顔に危険信号がともらないうちに、直次郎はもちろん、ひとりで手錠をかけなおした。

蛇塚から宇賀神へくだる道は、くねくねと折れまがって、左手に深い谷をのぞんでいる。このあたりには、蛇にちなんだ地名が多く、谷底を流れる川も、蛇入川というのだった。宇賀神も縁があつて、からだは白蛇、それに人間の首がついていて、白い髯をはやした老人の顔になっている、という神様だそうだ。

「農家に福をさずける神様なんです。もっとも、弁天さまと同じものなんだ、という説もあるように、女体の像をまつところもあるらしいが、ここのは白蛇です。弁天さまにしても、使姫は白い蛇だから、縁はあるわけですな。いまじゃあ、わたしたちも、うがじん、といってますが、うかじん、と澄んで読むのが正しいそうできてね」

と、笑顔で教えてくれた牛山巡查が、いまは峻烈の表情をもって、直次郎から目を離さない。それも、紬志津夫と蛇入川のせいだ。左がわに牛山がすわっていて、蛇入川を見おろすことは出来ないから、ドライバーズ・シートに突き出ている推理作家の後頭部を睨んで、直次郎は内心、舌うちをした。それが聞えたみたいに、紬はバックミラーに目をやって、

「片岡君、ぼくの証言で、こんなことになって、申しわけない。小説のなかでしか、嘘のつけないたちなんですね。駐在についたら、すぐに電話を借りて、物部さんに相談するよ。なあに、心配ないさ」

「心配してくださいと、所長は本気にしませんよ。話は直接、ぼくがします」

不機嫌に直次郎がいうと、牛山巡查は、いったんホールスターにおさめた拳銃に、また手をかけながら、

「あんたがた、陰謀をたくらんじゃ困るな」

「陰謀じゃない。当然の権利を、行使しようとしているだけです。被疑者は弁護士に、電話をかけられるはずでしょう。あいにく弁護士の手配がないから、上役に相談するってわけですよ」

直次郎につづいて、紬もバックミラーを見あげながら、

「気が早いようですけど、牛山さんが真剣らしいから、片岡君は万一の用意をしようとしているんです。現行犯で逮捕された人間にだって、弁護士に相談する権利はあるんだ。あんたが許可しないようなら、ぼくは断然、問題にするよ」

といったとたん、牛山巡査が返事のかわりに、妙な声をあげた。車が路肩に、はみだそうとしたのだ。下は千仞せんの谷だから、紬はあわててハンドルに専念した。それで胆をひやしたせいか、牛山松吉は黙りこんで、宇賀神の駐在所につくと、電話をかけさせてくれた。直次郎は手錠をかけられたまま、ダイヤルは牛山がまわした。先方が出ると、名前をたしかめてから、巡査は直次郎に受話器をわたして、机の反対がわに腰をおろした。

「もしもし、所長ですか。片岡直次郎です。いま能登半島の裏閔町、宇賀神駐在所というところから、電話しています。海女あまと朝市で有名な輪島の手前、利鎌市の外れの山のなかでしてね。紬先生ご依頼の、三十年前の事件現場の近くです。そこに森田という、江戸時代には庄屋だった旧家があるんですが……」

「そんな細かい報告はいいよ。帰ってから、書類にしてくれ。気がむいたら、いつか読む。ぼくはいま、忙しいんだ」

山の彼方の空遠く、東京は渋谷、宮益坂のおんぼろビルディングにある事務所から、物部太郎の声は、いかにも上の空に聞えてきた。片岡直次郎は調子を高めて、

「そんなはずはないでしょう。とにかく、聞いてください。その森田家で、一時間ばかり前に、事件が起ったんです」

「もう少し、ゆっくり帰ってくりゃあ、よかったな。こんな電話に、出ないですんだんだ」

「なんですって——やっぱり、ぼくの留守をいいことに、事務所をしめて、出あるいていたんで

すか」

「大声をあげなくたって、聞えるよ。こっちのひとりごとが、ちゃんと聞えたんだろう。出るきたくても、出るせないんだ。おやじのPR熱心と、きみの金もうけ熱心のおかげでね。あいかわらず、たまにお客がやってくる。きみに教えられた理屈でことわるか、めんど臭いときには、所長が出張ちゅうだから、また後日にといいて、お引きとりを願っているけど」

「あきれたな。所長はあなたでしょう」

「はじめての客にわかるもんか、そんなこと——きょうは特別なんだ。アナステインのパズルを、池袋の西武デパートで売っているって聞いたんで、買いにいったんだよ。そしたら、おまけにエルメスのすばらしいキイホルダーを見つけてね」

「なんのパズルですって？」

「ジグソー・パズルのジグソー・パズルさ。ジョーゼフ・L・マンキャヴィツチ監督の『スルース』って映画のなかに、出てきたろう。ローレンス・オリヴィエ扮する推理作家のすまいの装置がすてきで、ぼくは七、八回、この映画を見ている。壁の隠し金庫の扉が、黄金細工のダートきんの的になっていて、黄金のダートを投げてブルズ・アイに当てないと開かなかったり、トイレットの壁がクロスワード・パズルになっていたりして、実にうらやましいんだ。そういう大道具、小道具のなかに、専用の小さなテーブルにジグソー・パズルが乗っているところが、三度でくる。最初は組みあわせはじめたところ、二度目は半ば出来あがっているところだね。三度目に画

面に現れるときには、パズルが完成しているんだが、これがどう見てもまっ白、絵でも写真でもないんだよ」

「好きな話をさえぎってすみませんが、こっちはそれどころじゃないんです。森田家で起った事件というのは、土蔵のなかで人が殺されたんです。聞いてください」

「こっちの話を聞いたら、そっちの話も聞いてやるよ。いいかい。まっ白なジグソー・パズルってのは、おもしろいだろう。そういう製品が実際にあるのか、それとも、美術監督のアイディアで、わざわざ『スルース』のために作ったものなのか、ぼくは調べていたわけさ、それ以来」

「やっとわかって、現実にあったわけですね。おめでとう。こっちはおめでたくなって、土蔵の外には目撃者があつた。入ったものも、出たものもないのに、土蔵のなかでは、森田家の娘が殺されていたんです」

「ウイリアム・アナステイシというアメリカの画家のもので、実はまっ白じゃない。白いジグソー・パズルの絵を、ジグソー・パズルにした作品なんだ。わかるかな。白地にジグソー・パズルの曲線を書いた絵を、その絵のジグソー・パズルの線とは違った切りかたで、本物のジグソー・パズルにしてあるわけだよ。アナステイシってのは、ポップアートの絵かきなんだろうね、おそらく——そのジグソー・パズルのジグソー・パズルは、現在、ニューヨークのミュージアム・オブ・モダンアートにおさまっていて、複製が販売されている、というところまではわかった。でも、わざわざニューヨークへ買いに行くのは、めんどろ臭い。手紙を書いて、注文するのも、め

んどう臭い。だから、ほうっておいたんだが、手近で買えるとなりゃあ、飛んでいったって、先祖のものぐさ太郎にも、申しわけは立つだろう」

「被害者は当主の森田清の娘で、緋美子というんですが、これが土蔵に入るところは、目撃者が確認している。その後は、出入りしたものがない。つまり、所長のお好きな不可能犯罪なんですよ」

「ぼくは犯罪事件は好きじゃないが、変ったパズルは好きだからね。さっそく池袋の西武へ行って、十二階の美術書売場で、そいつを買ったわけさ。それから、ぶらぶら階段をおりて行って、六階のエルメスの売場をのぞいたら、絶妙なキイホルダーが目についたんだ」

「目についたはずなんですよ、出入りしたものがあれば——土蔵の戸口はひとつだけですからね。大扉はあけっぱなしになっていたけど、障子がしまっていた。もともと、被害者といっしょに、土蔵に入った男がいて、死体を発見して、騒ぎたてたんです。当然、これが疑われたわけですね。その男というのが、ぼくなんですよ、運が悪いことに」

「運がよかったよ、エルメスの売場をのぞいて——飾り紐のかたちをしたキイホルダーなんだ。手づくりの銀細工で、紐は細かい鎖で編みである。両端が飾り房になっていて、それを二つ折りにして、締め金具でまとめた、という恰好になっているんだ」

「恰好がつきませんよ、おなじ土蔵のなかで人が殺されているのを、ぜんぜん知らなかったというんじゃない。だから、疑われてもしようがないんですが、絶対にぼくじゃない。ぼくは犯人に利